

ボイブンバに見るアマゾンの描かれ方 ——トアーダに登場する理想化されたカボクロ像

瀧藤 千恵美

1. はじめに

ブラジルのアマゾンでは年に一度「ボイブンバ (Boi-Bumbá)」と呼ばれる祭りが開催される。この祭りは 30 年以上継続して行われており、ブラジルでカーニバルに次いで二番目に大規模な祭りと言われている。ボイブンバはアマゾン地方色を前面に押し出した祭りである。その中で演じられるのはインディオやインディオの血を引く人々の生活慣習、アマゾンの自然環境、歴史、伝説など、この地域特有の他所では見られないモチーフが多い。祭りでは、アマゾンの産物がいかに素晴らしく偉大であるかが謳われ、そのスペクタクルが観光客の興味を誘っている。しかし、現実のアマゾンと祭りの中で演じられている姿は必ずしも同一ではない。地域独自の文化や伝統が実際とは異なった「創られた」イメージに置き換えられることは、特に第三世界の観光分野において、しばしば見受けられる状況でもある。¹ 事実、ボイブンバでもモチーフの大部分が、実際よりも美化して表現されているのである。

本稿では、ボイブンバの中で用いられるアマゾンモチーフの中でも、特に「カボクロ」と呼ばれるアマゾン地方に居住する混血の民を焦点に当てる。祭りの中では彼らが現実とは異なる完全に理想化された姿で謳われることに注目する。その際、祭りのテーマ曲を用いて、歌詞の中で登場するカボクロの姿を読み取っていく。そしてこの理想化の背景を探り、モチーフを理想化して表象することがどのような意義を持つのか考察したい。²

2. ボイブンバとは

「ボイブンバ」とはブラジルのアマゾナス州パリンチンス (Parintins) 市で毎年 6 月 28、29、30 日の三日間連続して行われる「パリンチンス・folklore³祭 (Festival Folclórico de Parintins)」を指す。また、その祭りでの踊りや、使

用される音楽のことも同様にボイブンバと称されている。この祭りの起源は、ブラジル北東部で、6月の三聖人を祝うために演じられる民俗劇「ブンバ・メウ・ボイ (Bumba-Meu-Boi)」である。19世紀後半から20世紀初頭にかけてのゴム景気の頃、北東部出身の人々のアマゾン移住によってこの民俗劇が北部に持ち込まれた。そして時が経つにつれ、オリジナルに北部独特の要素、つまりインディオ要素が加えられていった。初期の頃は地域の路上で劇が演じられていたが、1966年にパリンチンス・フォルクローレ祭という名のもとに大規模な祭りとして開催されるようになった。

現在の祭りでは2チームに分かれ、赤チームの「ガランチード (Garantido)」と青チームの「カプリショーズ (Caprichoso)」が互いに争い、22項目の審査基準により勝敗を決める形式で運営されている。祭りの中で用いられるモチーフには、ブンバ・メウ・ボイで演じられる代表的な「アウト・ド・ボイ (Auto do Boi)」のストーリーに起源をもつ登場人物(牛、祈祷師、農場主、農場主の娘、インディオの集団など)をはじめ、インディオの儀礼的要素やアマゾンの伝説上の生き物などが挙げられる。毎晩各チームが行うパレードにそれぞれテーマがあり、それに沿ってストーリーを展開させて演じていく祭りである。

3. トアーダ

毎年祭りでは「トアーダ (toada)」⁴と呼ばれるテーマ曲が流される。両チームが各々毎年約20曲の新曲を発表し、それを録音したCDが売り出される。その他に、ボイブンバを演奏するグループがそれぞれ作曲、作詞した持ち歌のトアーダもあり、そのCDも同様に市場に出される。

振り付けのない一部のトアーダを除き、全てのトアーダにはそれぞれ異なった踊りの振り付けが付いている。祭りの約半年前にその年の新しいトアーダが発表され、その時期からアマゾナス州の最大都市マナウス (Manaus) では、毎週末エンサイオ (ensaio: 公開練習) が開かれる。そこでバンドの演奏にあわせて踊るステージ上のダンサーを観客が真似して踊ることで、事前に曲や踊りを覚えることができる。またエンサイオがマナウスでは一種の娯楽として住民に親しまれている。

祭りの規定にはトアーダであるための条件として「原始時代から現代までの歴史、地理、文化、社会的要素を含んだ歌詞」⁵と書かれている。トアーダの歌詞は、その年のチームのテーマ内容を効果的に、かつ正確に人々に伝えること

が出来る最たるものである。各年の祭りのテーマはアマゾンの歴史や伝説、神話、自然と人間との問題などを取り上げるため、結果的にトアードもそうした要素を盛り込んだ歌詞が多い。歌詞の内容は大きく分けて： チームの賛歌や応援歌、 カボクロ要素が多く登場するもの、 インディオ要素が多く登場するもの、 アマゾンの歴史、の4種類が挙げられよう。またここ最近の傾向として、環境への関心の高まりからアマゾンの自然環境を謳ったものも多く見られる。

本稿ではこの中でも の「カボクロ要素が多く登場する」トアードに焦点を当て、その中で表象されるカボクロ像がどのようなものかを検討していく。

4. 現実のカボクロ像

カボクロ (caboclo) という語は、辞書的定義によると、白人とインディオの混血児、原住民の古称、奥地の人、文明化したインディオ、赤銅色の肌の農夫・田舎者を意味する。このように多様な意味を持つ単語ではあるが、本稿では田所の説明する「文化的背景を持つ人間像としての真の意味のカボクロは、特にアマゾン河水系および北部地域の河川の水辺に暮らす者」⁶というカボクロ像を対象とする。アマゾン地域の住民の多くが混血であり、インディオと白人の血を引いたカボクロと言えるからである。⁷

そもそも「カボクロ」という語はどのような意味合いを持つのか。前山はカボクロという語について以下のように説明している。

おもに下層の、無知な田舎者を指す。トゥピ語の caá-bóc (森から出てきた者 の意) から出た言葉⁸で、もともと混血者の意味はない。古くはインディオ自体や、特に白人社会に接触し、奴隷化され、キリスト教になじんだインディオを指し、やがては白人の土着した者や白人とインディオの混血者をも意味するようになった。元来軽蔑の意味がある⁹

即ち、元来カボクロという語彙そのものが「軽蔑」という意味合いを兼ね備えていたことが分かる。次の例は Charles Wagley が 1930 年代から 40 年代にかけてアマゾン流域を探検した際に訪れた、イターの町¹⁰におけるカボクロという語の使用状況を述べている。

ファースト・クラスの人々は、自分達より下層の人々を総て「一般民衆」、即ち「カボクロ」という一つの階層に見がちである。一方、町のセカンド・

クラスの人々は、農村の人々を総て「カボクロ」と呼び、彼等より上位にあることを誇示する。そして、農民は「カボクロ」という言葉を島々に住む採集人を指して使う。農民は、自分達が島々に住む採集人たちよりも上位であると信じており、彼等を「カボクロ」と呼ぶのである。そして、島々に住む採集人は「カボクロ」と呼ばれると少々感情を傷つけられ怒る。(中略) 採集人は、「カボクロ」という言葉を部族インディオに対して使う。従って、アマゾンで言うところの「カボクロ」は、上位の階層の下位の階層に対する観念の中にしか存在しない。¹¹

上記の2例に見られるように、「カボクロ」という言葉によって示される人々は「下層の、無知な田舎者」であり、「軽蔑」が含まれた「上位の階層の下位の階層に対する観念」の中で捉えられる存在であると言える。

ブラジルの文化人類学者 Darcy Ribeiro は、最下層に位置付けられる自給自足の生活を営むインディオと社会的中産階級との中間的な階層として、カボクロがブラジル市場経済の周辺に位置する悲惨な存在であると主張している。彼は『フォーリャ・ジ・サンパウロ (Folha de São Paulo)』紙の記事の中で次のように述べている。

文明が到着すると、彼ら(インディオ)は塩や、食べ物や、布を買うために生産をするようになり、生活の方法を失う。労働をするようになり、カボクロのような生活をするに至る。そしてカボクロと、文明からの距離をおいて生活しているインディオの集落の一員とは、生活水準では比較にならない。カボクロは悲惨な状態で飢えの中で生きている。なぜなら彼は食べるために雇われて労働をするからだ。一方でインディオは、商品作物を作る必要がないので、狩りをしたり、漁をしたり、畑を作ったりする時間がある。食糧は豊富だ。しかし一旦商品作物を作ることを強制されると、カボクロの状態に陥ることになる。¹²

つまり、ブラジル社会や文化へ統合されることで、インディオは労働力たるカボクロへと下がり、零落するのである。Ribeiro は、飢えと貧困に苦しむカボクロの身分になるよりも、孤立したインディオでいる方が、はるかに人間的に豊かな生活を送ることができると強調している。¹³

以上の例から判断できるように、「カボクロ」という言葉、またカボクロという存在には、一般的にネガティブなイメージが付きまといがちであると言える。

5. トアーダの中でのカボクロ像

これに対し、トアーダに登場するカボクロは、自然との結びつきの密接さが強調されている。また自然の恩恵を受け、それを賢く利用する姿が謳われている。本稿では 1995 年から 2003 年までのトアーダの中からカボクロ要素が多く含まれているものを何曲か取り上げ、これらのトアーダの中でカボクロというモチーフがどのような姿で表現されているかを考察する。今回は

- ・ Rios de Promessa (Caprichoso 1995)
- ・ Rio Amazonas (Garantido 1995)
- ・ Herói Anônimo (Caprichoso 1997)
- ・ Bicho-Homem (Caprichoso 1998)
- ・ Amazônia Cabôcla (Caprichoso 2002)
- ・ Caboclo da Amazônia (Garantido 2003)

の 6 曲を対象としている。

まずは“Rios de Promessa”（約束の川）からの歌詞の引用である。

Sou um proeiro ribeirinho
Sou um proeiro pescador
Não estou sozinho, não estou sozinho
Eu sou esse rio, esse sol, essa terra
Sou parte da selva
Ela é parte de nós

ここでは、漁師である私（カボクロ）は「川」であり「太陽」であり「大地」である。そして「私は森の一部（Sou parte da selva）」であるし「森は私たちの一部（Ela é parte de nós）」でもある。つまり、“Não estou sozinho”（私は一人ではないさ）と言っていることから推測できるように、川に根付いた生活を送るカボクロと彼の生活環境を取り巻く自然との一体化を強調している。カボクロがアマゾンの自然と密接に結びついて生活する姿は“Rio Amazonas”（アマゾン川）や“Caboclo da Amazônia”（アマゾンのカボクロ）のトアーダの中においても具体的に描写されている。

O teu caboclo
Tão altivo e altaneiro
（中略）

Traz o tucupí, traz o tacacá
Tem pacu, bodó e curimatá
Vinho de cupu e taperebá¹⁴
Festa de caboclo “destrezo” (Rio Amazonas)

このトアーダの中で、カボクロは「気高く誇り高い (ativo e altaneiro)」存在であり、そうした彼らが担い手となる祭りもまた素晴らしいものだと言われている。そして後半部分ではアマゾンの幸を挙げ連ね、自然の恩恵を「賢く (destrezo)」利用する姿が描かれている。

Tem peixe na malhadeira
Farinha e beijú na sua mesa
Caboclo da Amazônia

Na várzea um juteiro mergulha sem medo
Em busca das fibras nas águas
Ordenha o vaqueiro faz cedo
E na proa da canoa
Pescador lança a tarrafa
Na terra firme
O seringueiro defuma a borracha
Piaçaveiro se embrenha nas matas
Farinheiro escorrendo o seu tipiti (Caboclo da Amazônia)

ここで描かれているカボクロは、自然と結びついた様々な職業を持っている。歌詞に出てくる順番に並べると「ジュート¹⁵栽培者 (juteiro)」、「牛飼 (vaqueiro)」、「漁師 (pescador)」、「ゴム採取労働者 (seringueiro)」、「ピアサバヤシ¹⁶栽培者 (piaçaveiro)」、「ファリーニャ¹⁷製造者 (farinheiro)」が挙げられている。どれもアマゾンの大自然がなければ成立しない仕事であり、そこから自然との密接な繋がりが見て取れる。そして、アマゾンのカボクロたちは魚を釣り、そこで採れる食物から食事を作り、それらを食卓の上に並べるのである。

“Herói Anônimo”(無名の英雄)の中では、カボクロは「森林労働者 (mateiro)」であり、「漁師 (pescador)」であり、「船乗り (navegador)」でもある。彼らはみなアマゾンの自然に従事した労働で生計を立てており、自然と共存して暮らしている。またこのトアーダでは

Que desafio
Quando somos na curva do rio
Enfrentando o sol ou tremendo de frio

という表現から窺えるように、偉大なる大自然の力に翻弄されつつも、強く対抗していく姿勢が見られる。それゆえ、このトアーダではカボクロのことを「強く (forte)」「逞しく (viril)」「勇敢な (valente)」存在であると歌い、無名ではあるけれども、“És o meu herói”(お前は私の英雄だ)と称賛しているのである。

“Herói Anônimo”と同様、“Bicho-Homem”(偉大な人)や“Amazônia Cabôcla”(カボクロのアマゾン)においても、力強く勇敢なカボクロ像が表現されている。

Sou guerreiro tropicante
Sou valente, sei da dor
Sou da guerra, sou da terra
Eu sou do amor

Sou, sou, sou, eu sou caboclo
Eu vim do negro, vim do branco
Vim do índio (Bicho-Homem)

“Bicho-Homem”の中で描かれるカボクロは「熱帯の戦士 (guerreiro tropicante)」である。カボクロの私は「勇敢である (valente)」と同時にまた「痛みを知って (sei da dor)」いる。私は「戦い (guerra)」、「大地 (terra)」そして「愛 (amor)」からできている。通常、トアーダの中では「戦士」のモチーフはインディオと絡めて用いられることが多い。カボクロとインディオが同じ位置付けで表現されることは、アフロ・ブラジリアン宗教「ウンバンダ (Umbanda)」においても見受けられる。ウンバンダの儀礼におけるカボクロの憑依霊カテゴリーはつねに「勇敢で、雄々しく、誇り高く、奴隷となるよりは死を選ぶ、独立自尊の、密林に生き、密林の秘密につうじ、弓矢をたずさえた、優れた狩人たるインディオ」¹⁸として上位に位置付けられている。ここで引用の後半部分を注目したい。「私はカボクロであり、黒人と白人とインディオでできている」と歌われている。Renato Ortiz の説く「三人種の神話 (mito das três raças)」は、ブラジル人およびブラジル文化が三つの人種、即ちインディオ、白人、黒人の遭遇と混交の

結果生じた全くオリジナルなものであると積極的に評価する思想¹⁹であるが、この思想はトアードの中、ひいてはボイブンバ全体にも顕著に表れており、この一節でもそのイデオロギーが読み取れるのではないだろうか。²⁰

また“Amazônia Cabôcla”では次のようにカボクロを描いている。

Mas o caboclo
É forte valente e guerreiro
Defende a selva do qual
Aprendeu ser amante
Entre o verde e o caboclo (Amazônia Cabôcla)

カボクロは「強く勇敢な戦士 (forte valente e guerreiro)」であり、「森林を守る (defende a selva)」役割を持っている。その森林は「緑とカボクロの間に愛することを教えてくれた (aprendeu ser amante entre o verde e o caboclo)」存在である。カボクロは「勇敢で誇り高いインディオ」の血を受け継いだ頑強な戦士であると同時に、彼らの生活を取り巻いている自然を守る番人でもあるのだ。

6. カボクロ像理想化の背景

元来カボクロは、都市から隔離した地方で原始的な生活を営んでいる「下層」で「田舎者」といったネガティブなイメージを与えられていた。「ブラジル性」の正当な構成要素としてインディオが編入されたのは 19 世紀中盤からであり、上述した「三人種の神話」の登場以前には、ブラジルの混血性がヨーロッパ世界に対する劣等性を少なからず意味していた。これを踏まえると、インディオの血を引く混血のカボクロは、当時のブラジル社会において「軽蔑」すべき存在だったとも言えるかもしれない。現在人種間の融合が顕著に進み、ブラジル人アイデンティティにおいて混血性が肯定的に受け止められてきている。しかしながら社会的立場を見れば、依然としてカボクロは、Darcy Ribeiro の言葉を借りるならば、「飢えと貧困に苦しみ」「悲惨な状態」で暮らす、社会の周辺に位置付けられた人なのである。

一方、トアードの中で描かれるカボクロは押し並べて、アマゾンの大自然と親密な関係を築いている。彼らは自然と密接に繋がった生活を送るがゆえに「賢く」そして「気高い」自然の智者として、誇り高くポジティブなイメージで全体的に描かれている。さらにインディオの血をひく「強く勇敢な戦士」でもあ

る。カボクロ像は、実在のカボクロよりはるかに理想化、美化して描かれているのである。

こうした事実はボイブンバにおけるトアードをはじめ、ブラジル文学の中で頻繁に題材にあげられるインディオ像と関連づけることができよう。実在のインディオとはほとんど関係のないステレオタイプのインディオ像がそれらの中で見受けられる。19世紀中葉、ブラジルではブラジル性の特質を秘めた独特のロマンティシズムが蔓延した。この思想を通じて形成された「インディアニズモ(indianismo: インディオ称揚主義)」²¹思潮において、インディオは「勇敢な戦士・誇り高き自由人」と理想化され、「高貴な未開人」というインディオ像が一般に普及することとなった。インディオ要素、ひいてはアマゾン要素は、白人、黒人要素と並んでブラジル史の基底要因として深く関わり、社会・文化の生成においても大きな影響を与えている。ブラジル発見当時、白人征服者がインディオを怠惰で劣等な人種とみなし、彼らの物質・精神文化を評価しなかったことから、インディオがもたらした遺産は長年の間否定されてきた。このインディアニズモ運動はインディオを称賛・理想化することで文化的脱植民地化のプロセスを図ると同時に、人種間融合が顕著に見られるブラジル社会において、ナショナル・アイデンティティを評価する重大な要素の一つでもあった。ボイブンバを運営する人々はアマゾンの住人であり、ほぼ大半がカボクロであるといっても過言ではない。つまり、祭りの担い手であるカボクロが、自分たちはインディオの血統を受け継いでいるという出自であり、どれほど有能で、優れているかということをつとアードによって構築し、他者に語り伝え、また自ら再認識するのである。²²

本稿ではインディオ像については触れていないが、トアードの中で描かれるインディオは、長年にわたり独自の文明を保持し、白人侵略者に勇敢に立ち向かう戦士の姿として描かれている。また、アマゾンに対するイメージはいまだ「緑の魔境」と称されるほど、非常に未開で辺鄙なイメージが付きまとう。しかしトアードで謳われるアマゾンは神がもたらした恵みの大地であり、インディオやカボクロに豊富な幸を授けてくれる場である。ボイブンバの担い手たちは、歴史の中で培われたネガティブなイメージの脱却を図り、一貫してアマゾンに対するポジティブなイメージをつとアードによって植え付けている。カボクロの、泥臭く、社会の下層部に位置する姿が、トアードの中においては素朴で勇敢な自然の智者に置き換えられ、称賛の対象となっているように、祭りで用

いられるアマゾン特有のモチーフは、カボクロ像と同じく理想的な姿で表現され、この地方に対する社会的バイアスをプラスに転換する役割を果たしているのではないだろうか。

7. 近年のモチーフ理想化の意義

文化面以外の側面を見てみると、カボクロをはじめとした祭りのモチーフを、トアーダの中において実際の姿よりも美化して表現する姿勢は、少なからず観光客を呼び寄せるのに貢献していると思われる。最近の風潮で、環境への関心の高まりからエコツーリズムが脚光を浴びているが、ブラジルのアマゾン地域も格好の舞台として注目され、年々観光客が押し寄せる。ボイブンバはよく「インディオの祭り」と称されるが、例えばアマゾンで繰り広げられる「戦士の民による魅惑の祭り」²³などと形容されれば、それは非常に有効な宣伝となるに違いない。祭りの運営にはアマゾナス州政府が全面的に支援しており、州観光局はこうした宣伝文句を用いて観光客誘致に励んでいる。というのも、祭りは自発的発展の乏しい地域において大いに呼び水となりうる。ブラジル北部のアマゾン地域一帯は、第一次産業や第二次産業の活発な発展が見られず、地理的条件もあいまって、経済的自立が大変困難な地域である。そのため第三次産業への期待は大きく、中でも観光業は将来のアマゾン地方の自発的な経済発展の鍵となりうる産業と考えられている。観光戦略において「イメージ」は重要な位置を占める。「(「観光者産出社会」が想定する)キャッチフレーズを自らも使い、他者のイメージに合わせた行動をとり、観光客が期待する役割を果たす」²⁴という、往々に第三世界で見られる観光戦略は、同様にボイブンバでも適用されていることが分かる。他者が描くインディオやカボクロのイメージはまさにトアーダの中で描かれる理想的な姿であり、祭りの中でもそれが求められている。美化されたモチーフは、それを期待していた観客を喜ばせる。そして、更に観光客からの満足を得るため、実際よりも理想的なイメージをボイブンバの中で登場させているのではないだろうか。

つまり、トアーダで謳われるメッセージはアマゾンの民に対して、ルーツを肯定的に意識させると同時に、他者に対しては、アマゾンへ惹きつける戦略的効果も有していると考ええる。そのため、現実と異なる完全に理想化されたモチーフがボイブンバでは表現されていると言えるであろう。

本稿は 2003 年 11 月 2 日の日本ポルトガルブラジル学会にて口頭発表したものに大幅な加筆修正を行ったものである。

注

- 1 例えば、中村はニューカレドニアの先住民家屋「カーズ」を例に、歴史的な「伝統文化」が変容する観点から、新たに創造された文化について考察している。中村純子「観光文化としての先住民家屋」橋本・佐藤編、148-170 頁。また、橋本はフィジーで観光客向けに行われるショーを例に挙げて分析している。橋本、215-264 頁。
- 2 ボイブンバに関する研究は数えるほどしかなく、日本語文献にいたっては皆無である。主立ったものとして Braga の論文“Os Bois-Bumbás de Parintins”が挙げられる。彼はボイブンバの構造と歴史を分析し、その中で各年の祭りのテーマとそれに基づいたアマゾンモチーフの演出表現に一部触れているが、あくまでも概要的なものとなっている。そのため本稿ではアマゾンモチーフの中でも「カボクロ」に着目し、論を展開している。
- 3 ここで用いる「フォルクローレ」はポルトガル語の“folclore”(英語では“folklore”)の意味であり、民間伝承や民俗芸能のこと。
- 4 祭りで用いられる独特の用語であり、ボイブンバのための特別な楽曲を指す。辞書的定義は「(単純な)音、歌」、「騒音、物音」、「高らかに響くこと」など。
- 5 2003 年の祭りの規定“Capítulo XIII Art. 39”による。
- 6 田所、16 頁。
- 7 ブラジル地理統計院 (IBGE) が 2000 年に行った国勢調査では、アマゾナス州の人口に占める混血 (parda: 実際の意味は「褐色」)。この調査では人種構成を「白色系」「黒色系」「黄色系」「褐色系」「先住民」と項目分けしているため、混血は「褐色」として申告される)の割合は 68%と報告している。しかし任意申告のため、多くの混血が白色系として記入していることが指摘されており、正確な資料とは言い難い。そのため、少なく見積もっても人口の 75%は混血ではないかと思われる。またアマゾナス州の黒人の占める割合が 3% (ブラジル北部をとっても 5%) であることから、混血のほぼ全てがインディオと白人の混血であるカボクロではないかと予想される。
- 8 古谷によると、「caboclo」の語源について定説はないと言われている。本文で挙げてある“caá+bóc”の他に、トゥピ・グアラニ語起源の“kari'boka”(白人由来の)という説も存在する。古谷、271 頁。
- 9 前山隆「カボクロ」大貫編、113 頁。
- 10 アマゾン川下流の小さな町にワグレイがつけた仮名。
- 11 ワグレイ、91-92、124 頁。
- 12 1996 年 8 月 11 日付 *Folha de São Paulo* 紙の記事“A maior carta de amor do mundo”より。
- 13 田所、187-188 頁。

- 14 tucupi, tacacá はアマゾンの食べ物、pacu, bodó, curimatá はアマゾン川に生息する魚、cupu, taperebá はアマゾン特有の果実である。
- 15 ジュート (juta) : インド原産のシナノキ科の植物。黄麻。その繊維は麻袋や糸製品など様々な用途で使われる。
- 16 ピアサバヤシ (piaçaba あるいは piaçava) : ヤシ科の熱帯性植物。綱や箒の材料として繊維が使われる。
- 17 ファリーニャ (farinha) : ここではキャッサバ芋の澱粉を粉状にしたものを指す。アマゾンでは主食としてよく食べられる。
- 18 古谷によれば、研究者のモノグラフでも神学者の教義書でも「カボクロ」はつねに「インディオの霊」であると述べられている。古谷、263 頁。
- 19 古谷、266 頁。
- 20 「カボクロ」の厳密な意味合いには黒人の血は含まれないが、ここで強調されるのは言わば「メスチーソ (mestiço : 混血) 性」であり、混血の人種集団の一つとしてカボクロが代表的に取り扱われていると考えられる。
- 21 文学上の概念で、先住民インディオを審美の対象[主題]に据え、混血国民の象徴として現実以上に理想化し、また賞賛・高揚しようとする、ブラジル浪漫主義の本質をなす特色の一つでもある。このイズムの思想的基盤は、ルソーにみる「善良なる野蛮人」に代表されるような、フランスの啓蒙主義の中に見いだされる。田所、169 頁。
- 22 ボイブンバのテーマにも、アマゾン地域住民の「意識向上運動 (conscientização)」の意図が汲み取れることは Braga も指摘している。Braga、63-64 頁。
- 23 2000 年に行われた祭りのキャッチフレーズ。例えば 2003 年は「自然の美、アマゾンジャングルでのカボクロによる魅惑のオペラ」であった。他にもボイブンバを紹介する場合の宣伝文句として「インディオ」、「カボクロ」、「(アマゾンの) ジャングル」という語が欠かさず登場する。
- 24 橋本、232 頁。

主要参考文献・資料

- Academia das Ciências de Lisboa. *Dicionário da Língua Portuguesa Contemporânea*. Lisboa: Verbo, 2001.
- アマゾナス日系商工会議所 『マナウス アマゾナス日系商工会議所創立 10 周年誌』 アマゾナス日系商工会議所、1997 年。
- Assayag, Simão. *Boi-Bumbá festas, andanças, luz e pajelanças*. Rio de Janeiro: FUNARTE, 1995.
- . *Caprichoso, o Boi de Parintins*. Manaus: Editora Novo Tempo, 1997.
- Braga, Sérgio Ivan Gil. *Os Bois-Bumbás de Parintins*. Rio de Janeiro: FUNARTE/ Editora Universidade de Amazonas, 2002.
- 古谷嘉章 「憑依霊としてのカボクロ - アフロ・ブラジリアン・カルト研究における二つのモデル - 」 『民族学研究』 51 (3) 日本民族学会、1986 年、248-274 頁。

- ゲールブラン・アラン『アマゾン・瀕死の巨人』大貫良夫監修、創元社、1992年。
橋本和也『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』世界思想社、1999年。
橋本和也・佐藤幸男（編）『観光開発と文化 南からの問いかけ』世界思想社、2003年。
川田順造『ブラジルの記憶』NTT出版、1996年。
水野一・西沢利栄（編）『ラテンアメリカの環境と開発』新評論、1997年。
大貫良夫（編）『ラテン・アメリカを知る事典』平凡社、1999年。
Revista Parintins Toada e Boi-Bumbá. Manaus: RSC Editora/ Amazon Best, 2000.
シェルトン・デーヴィス『奇跡の犠牲者たち』関西ラテンアメリカ研究会訳、現代企画室、1985年。
田所清克『ブラジル学への誘い - その民族と文化の原点を求めて』世界思想社、2001年。
富野幹雄・住田育法（編）『ブラジル学を学ぶ人のために』世界思想社、2002年。
ワグレイ・C『アマゾンの町 - 熱帯と人間』小野功訳、新世界社、1973年。
- Caprichoso CD Oficial 1995-2003.
Garantido CD Oficial 1995-2003.
IBGE (Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística).
< <http://www.ibge.com.br/> >.
Parintins.com. < <http://parintins.com/> >.